

# 県退教協だより NO.76

長崎県退職教職員等連絡協議会  
長崎市筑後町二一 教育文化会館

☎〇九五―八二二―五一九五

日退教九州ブロック  
第24回研修会・第37回定期総会

三月十日から十一日と、二日間にわたり、「長崎県教育文化会館」で開催されます。毎年、九州八県・退教協回り持ちで開催されていますが、本年度は長崎県退教協が当番県として担当することになりました。一日目・全体会と、研修会が開かれます。九州各県から、約百数十名の会員が参加し二日間にわたって、研修会、総会（退教協運動・活動）と活発な意見交換が期待されます。

一日目の研修会は、第一分科会・第二分科会・第三分科会の三分科会に別れて、各単会からの報告をもとに討論が行われます。退教協だより・本号では、分科会内容について、紹介します。

第一分科会（組織の強化拡大）  
○レポート「組織の強化・拡大と財政の確立の現状」  
【報告者】熊本県退教協・平川 欽一

第二分科会（平和、人権、民主主義、環境）

○レポート①「戦争体験文集（若い人たちへ） 発刊の取り組み」  
【報告者】福岡県高退教協・坪根 侖  
○レポート②「反戦・反核・平和運動 三〇年の実践」

【報告者】鹿児島高退教協・上山 陸三  
○レポート③「沖縄県民の尊厳を取り戻す県知事選の闘い」  
【報告者】沖縄高退教協・安次嶺 美代子  
○レポート④「誰でも参加できる浜の町ウォークで、集団的自衛権行使・改憲阻止などを訴える行動」

【報告者】長崎県退教協・井上 澄夫

第三分科会（高齢者生活、福祉、医療、地域文化、ボランティア）  
○レポート①「藤津支部の文集活動の取り組み」  
【報告者】佐賀県退教協・浜田 良秋  
○レポート②「植物観察や採集、学習会の取り組み」

【報告者】宮崎県高退教協・濱畑 太海  
○レポート③「緑の奨学会」設立や活動状況の報告  
【報告者】大分県退現教・後藤 宏二

尚、一日目の開会行事、問題提起、二日目総会等についての概略は、たより77号に掲載します。

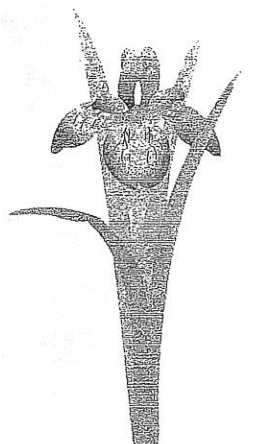
【活動報告】  
「メーデー」と「旗開き」に参加して  
退教協島南支部 ― 高原 篤司

★一八八六年アメリカ労働者の八時間労働制要求の示威運動が始まりと言われています。

一八八九年第二回インターナショナル創立大会で決定、一八九〇年から世界各地で挙行され、我が国では、一九二〇年（大正九年）が第一回です。

一九三六年（昭和十一年）以降禁止されましたが、四六年に復活しました。  
★平成二六年五月一日、島原市体育館で開催されたメーデーは、例年になく華やかであり、大勢の働くなかまが参加しました。

開会行事が無事終了。さあ！これから三ヶ苅超におよぶ街宣活動。主催者を先頭に、それに続く三〇数単組の組合員が、思い思いのベストを着て、各単組の組合旗を先頭に掲げ粛々と行進しました。  
何処も同じで、国道を歩けば信号が多くそのため行進が左がためられます。  
アーケード街に入るとホットした気になります。



★お昼近くになると、後一息、楽しい弁当の時間が待っています。

この弁当の時間が、とても楽しく、語り合いの場となります。現職の若い仲間、退女教の仲間、そして退教協の仲間との交流に花が咲きます。

楽しかった弁当のひとつが終わると事実上の流れ解散です。若い仲間たちは、グランドゴルフ大会に出場します。健闘を祈って拍手で激励。また来年も元気で会いましょう。

「島南総支部「旗開き」への参加」

★島南支部では、県教組の総支部統廃配合後も、旧島南総支部の闘いの歴史を語り継ぐために、現職組合員と私たち退教協・退女教協の仲間が一堂に会し、島南総支部旗の下で、酒食を共にして団結を誓い合ってきました。

去る一月十六日、午後四時から本年度の退職予定者四名と、退教協・退女教の代表者との懇話会がもたれました。

その中で、退教協・退女教のそれぞれの活動の様子が語られ、仲間への加入を働きかけられました。その席で、三名の方が退教協への加入の意思を表明されました。

★その後、場所を移し、午後六時から「旗開き」が催され、退教協・退女教の仲間一三名も参加して、総勢三〇名ばかりの盛大な宴席となりました。

年齢の差を超え、和気あいあいの中で総支部の活動の折々の場面が、走馬灯のように巡る楽しい時間が過ぎました。

そして、何よりも今年の「旗開き」が有意義であったのは、三名の退職予定者の方が揃って、退教協への加入を表明されたことです。このことは、日頃より現職組合員と退職者が絆を結ぶ取り組みに努めてきたことが結実したといえます。



「活動報告」

自分たちのできる範囲で行動

長崎県退女教・佐世保支部

（迎 千咲子）

☆佐世保支部は、発足四九年目。会員は現在九八名です。平均年齢は、八〇歳を超えています。

市内を地区別に、六グループに分け、業務の役割分担を行っています。

- 一、退教連・高問連との連携
- 二、女性団体との連携
- 三、現職との連携
- 四、研修・署名活動
- 五、研修旅行・諸カンパ活動
- 六、広報（退女教だより）

各グループから幹事さんを決めてもらい役員・幹事会を、年九回ほど開きます。

そこで、諸連絡・文書の配布・行事の計画などを話し合います。

☆一年間では、いろいろな行事・会合などがありますが、皆さんがとても楽しみにされているのは、一月の「新年会・長寿を祝う会」、五月の「総会」です。出席者も多く五〇名ほどです。

皆さんはともなつかしそうにお話しされ、食事をとり、次回会うことを約束しながら、なごりおしそうに帰られます。また、研修旅行も楽しみの一つです。

☆今、佐世保市は、「カジノ誘致」問題で目にはなされませんが、研修会でもとりあげ市議会傍聴、カジノ誘致に反対する署名集め、市長への請願と力を入れています。

現在、多くの問題が山積みされていますが、退女教の仲間たちと、自分たちのできる範囲で声を上げ、活動を続けていけたらいいなと思っています。

それに、他団体と協力して歩んでいくことも大切だと思っています。



ヨカ余暇生き生きコーナー(36)  
 ✕ 学習支援活動に参加して ✕  
 西彼退教協 今村 洋一

現場を離れて6年目を迎えます。映画センターの映画上映の合間、中学生の学習支援活動に昨年7月から参加しています。子どもたちの居場所作りが基本ですが、わからない所と一緒に学習しています。

教科は、英語・数学・理科・社会・国語が主です。学力差は千差万別です。一緒に解いて分かった時の子どもたちの表情は豊かですね！

支援する大人は5人、大学生が多いときは20人近くボランティアで参加しています。大学生も授業、テストなどで参加できない場合もありますが、横に座って一緒に話を聞き取りしています。

学習支援活動で、うれしい出会いもありました。子どもも会活動で出会った子どもが大学生になり、その子もボランティアとして参加しています。教わる立場から、教える立場に成長しています。あと一年で卒業ですが、大学院に行ってもう少し勉強するそうです。

人との出会いで人生大きく変わりますね！ここに通ってくる子どもたちが、学習支援活動に参加してよかったです実感できるような支援にしようとスタッフ

フ一同考えています。次年度は中一・中二・中三と支援活動を広げるそうです。子どもたちの自立支援の一助になればと考えています。

映画センターに籍を置いていきますので、映画の宣伝を少しさせていただきます。

○戦後70年目を迎える今年、広島で作られた映画『アオギリにたくして』を長崎でも上映したいと考えています。長崎にも被爆クスノキが山王神社にあります。広島にも同じように被爆アオギリがあり、2世の苗木の移植活動が続けられています。主人公は『にんげんをかえせ』に出ている女性(沼田さん)の半生を描いた作品です。彼女の半生も壮絶なものでした。是非ご覧ください。

○映画『ある精肉店のはなし』大阪貝塚市の精肉店のお話です。代々使用してきた屠畜場が、102年の歴史に幕を下ろしました。牛のいのちと全身全霊で向き合うある精肉店との出会いから、この映画は始まりました。

家族4人の息の合ったわが家で牛が捌かれていきます。牛と人の体温が混ざり合う屠場は、熱気に満ちていました。店に持ち帰られた枝肉は、丁寧に切り分けられ、店頭に並びます。皮は丹念になめされ、立派なだんじり太鼓

へと姿を変えていきます。各地区人教でも上映会が進んでいます。是非ご覧ください。

○映画『そして父になる』福山雅治主演、第66回カンヌ国際映画祭審査員賞受賞昨息子を取り違えられた二つの家族。血のつながりか、ともに過ごした時間か。突き付けられる慟哭の選択。

6年間育てた息子は、病院で取り違えられた他人の子だった。家族に起きた「事件」を通して、その愛と絆を描いた衝撃の感動作。

○映画『くちびるに歌を』長崎県・五島。「手紙」拜啓十五の君へ」の合唱にのせて贈る、涙の感動作。

主演・新垣 結衣  
 主題歌・アンジェラ・アキ  
 原作・中田 永一

長崎県・五島列島の中学校。ある天才ピアニストだったと噂される臨時教員の柏木先生が東京からやってくる。合唱部の顧問となった柏木先生は、コンクール出場を目指す部員に、「十五年後の自分」へ手紙を課題として出す。そこには15歳の彼らが抱える、誰にも言えない悩みと秘密が綴られていて……

人権・平和・いのち・仲間づくりなど社会派といわれる映画ですが、今の世の中に大切なメッセージがはいっています。

## アメリカの高校生が、こんな質問をしました

核保有国の若者は、原爆投下についてこんな思いや疑問を持っています。私は以下のような回答をしました。あなたなら、どう答えますか？

Q 原爆投下は、当時の日本人のアメリカに対する見方を変えましたか。

日本の敗戦は1945年8月15日とされています。占領軍は、同年9月19日から講和条約発効の1952年まで、プレスコード（報道規制）を実施し「原爆報道」を厳しく規制しました。被爆地広島・長崎以外では、原爆が人間に何をもたらしたかを知ることができませんでした。地獄の苦しみを受けた被爆者や家族を殺された人たちが、投下した側にどんな感情を持つかは想像できると思います。多くの人たちは、原爆そのものとそれを作り続ける者たちには強い憎しみを持っています。ただ、「アメリカ人を恨みますか？」と一括りにアメリカ人と聞かれるなら、「恨みようがない」としか言えません。なぜなら原爆開発は、議会の承認もない極秘のプロジェクトで、国民は知らされていなかったからです。

Q 私たちは歴史の授業で「トルーマン大統領が原爆を落とす決断をしたのは、戦争を終結させ何千人ものアメリカ人と日本人の命を救うためだ」と学びました。そのことについて賛同しますか。それとも他に戦争を終わらせる違う方法があったと思いますか

賛同しません。8月6日の演説でトルーマン大統領は「アメリカの若者の数千数万の命を救うために原爆を使用した」とは言いましたが、日本人については言及しませんでした。命の数については、後になるほど数字が大きくなり、100万人以上と発言するまでになりました。これは「原爆神話」と呼ばれ、今もアメリカではかなり残っていると思います。

原爆投下は必要なかったのです。日本列島は、ルメイ将軍の作戦通り、都市は瓦礫と焦土になり、迎撃能力はない状態でした。45年11月1日に米軍は「オリンピック作戦」という日本本土への上陸を計画していましたが、多くの将軍が、その前に日本が降伏すると発言した記録があります。原爆投下を避けるチャンスは何度もあったのに、最後まで「投下」の選択肢に固執したのです。開発に係わった約150人の科学者の投下反対の署名は、握りつぶされてトルーマン大統領に届くことはありませんでした。

Q 長崎、広島 of 市民にとって、原爆のターゲットにされたことに対して、何か考えるところはありますか。

原爆をどこに投下するかは、軍事責任者から開発責任者（グローブズ将軍）に任せられました。攻撃兵器としての原爆から原爆の威力を測定する兵器になったといえます。3発とも実験だったのです。なぜなら原爆は、2発のプルトニウム型と1発のウラン型の2種類あったので、投下地は2カ所必要でした。

なお、原爆開発は「ドイツより先に開発する」のが目的でしたが、1944年に米英首脳は「日本に対して使用する」と合意しました。開発目的が大きく変更されたのです。

70年の今年、私たちも、もう一度「原点」に立ち返って考えてみませんか。